

4 地球環境関係データ

■概要

(1) 大阪府域における温室効果ガス排出量の推移

府域における 2012（平成 24）年度の温室効果ガス排出量は 5,764 万トンであり、1990（平成 2）年度と比べ 2.5%減少し、前年度と比べると発電電力量における火力発電比率の増加等により 4.5%増加しています。また、2012 年度の二酸化炭素排出量は 5,529 万トンであり、1990 年度と比べ 4.4%増加し、前年度と比べ 4.3%増加しています。

（排出量は、各年度の関西電力の電力排出係数を用いて算定している。）

(2) 大阪府域におけるエネルギー消費量の推移

府域の石油製品の販売量等から算定したエネルギー消費量は、1990（平成 2）年度以降は、全体としては増加と減少を繰り返していますが、2012（平成 24）年度は 683PJ（PJ＝千兆ジュール）であり、1990 年度と比べ 12.1%減少し、前年度と比べても減少しています。

(3) 再生可能エネルギー等の導入実績

府における再生可能エネルギー等の導入実績（平成 25 年度末時点）は、太陽光発電が 44.9 万 kW であり、前年度と比べ、19.9 万 kW 増加しています。また、コージェネレーション等の分散型電源が 58.6 万 kW、廃棄物発電等が 23.8 万 kW、などとなっています。

(4) 酸性雨（酸性沈着）

「酸性雨」とは、以前は大気汚染物質である硫黄酸化物や窒素酸化物の影響により、降水の pH が酸性（pH5.6 以下）を示す雨のこととされてきました。しかし、現在では「酸性雨」は単に降水（湿性沈着）だけでなく、粒子状物質やガス状物質（乾性沈着）をあわせた「酸性沈着」として、国境を越えた広域的な問題としてもとらえられています。これらは土壌、樹木、湖沼などの生態系に影響を及ぼすおそれがあるといわれています。

府では全国的な酸性沈着に関する調査に参画するとともに、府内自治体と共同して梅雨期、秋期に調査を実施しています。これまでの調査結果によれば、全国的に平均 pH4.7 前後の酸性雨が降り続けていることが示されており、将来、これらによる影響が顕在化するおそれが考えられ、今後も注意深く監視を続ける必要があります。